

令和6年5月7日

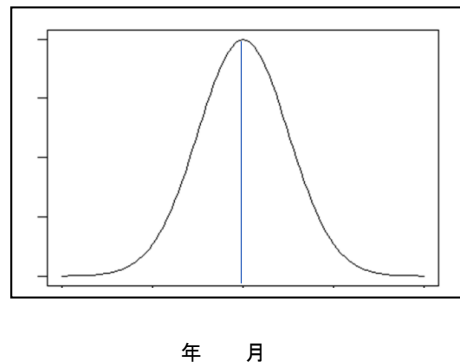
京口門だより No. 127

暦の上では5月5日は立夏となりますが、相変わらず朝夕はすこし冷えて日中は暖かい日が続き、また降雨も多い今年です。「窓の竹さ鳴りあかろき五月かな」（松根東洋城）

さて、よく病院で癌治療を受ける時に「余命何ヶ月」という宣告を受けます。病める患者の身にとってこの宣告は深刻な影響を与えます。一体この「余命何ヶ月」というのは何なんでしょうか。平たくいえばおなじ癌の患者さんの亡くなるまでの年月を集めて統計を取り、平均何年何ヶ月で亡くなるかを計算したものです。大勢の同病の患者さんの余命の平均数(あるいは中間数)です。

これを図で示すと右のようで横軸は年月、縦軸は人数になり、山の頂点から下る線が平均線(ないし中間線)です。図の山の左側は平均余命より早く亡くなる人達、山の右側の領域は平均余命より長く生きる人達となります。つまり「平均余命」より早く亡くなったり、もっと長く生きる方もいることです。

アメリカのハーバード大学医学部のある細菌学の教授が、中皮腫という癌にかかり、余命8ヶ月と判ったのですが、この教授は統計学の専門家であって、数『8ヶ月』結構ではないか、私は努めて長生きできる領域に入ってやるという、楽観的気持で養生を務め10年以上生きたと」記しています。



しばしば動かしがたい通告のように癌の余命宣言が成されますが、あくまで統計的な数字の表現にしか過ぎないのです。もっと早く亡くなる場合もあれば、もっと長く生きられる人もいるということを知るべきです。大きな影響を与える余命宣言は、医療者側からは丁寧に説明されるべきです。「平均的には何ヶ月という余命が出されていますが、治療や養生によって長く生きることのできるのですよ」と、ハーバート大学医学部教授は楽観的に考えることが癌治療の基本的姿勢とっています。しかし無制限に楽観的ではいけません。有効な治療法(例えば漢方治療のような免疫療法)やしっかりとした養生に裏づけされた療養でなくてはなりません。

